

1 8	豊田	浄水中学校	氏名	マツイ 松井	ヒデカズ 秀和
-----	----	-------	----	-----------	------------

分科会番号	2 0	分科会名	総合学習
-------	-----	------	------

研究題目 課題を自分事として考え、仲間と提案力・企画力を育てるプロジェクト学習
 — 2年 総合「まごころで地域とつながろう」の実践を通して —

研究要項

1 主題設定の理由

1年時に、「学校行事の中で、やりがいがあった行事は何か？」というアンケートをとったところ、約60%の生徒が「体育祭」と答えた。しかし、文化祭は5%程度であり、理由としては、「体育祭の表現は1から自分たちで決めることができたが、1年生の文化祭はSDGsと決められていたから」というものだった。生徒たちが、やりがいがあったと感じるのは、自分たちで決めることができたり、自分事として考えられたりする活動であると考えられる。さらにアンケートで「自分の意見を、自信をもって言うことができる」と答えた生徒は1割に満たなかった。その理由として挙げられたのは「意見を言ったら、みんながどう思うかが不安である」「間違っているかもしれないから言えない」というものだった。不安がゼロになることはないが、提案する経験を積んでいくことが、不安を和らげるものとする。また、浄水地区では多くのイベントが企画されているが、地元のマルシェに参加したことある生徒は20%程度と少なかった。地元への意識が軽薄になってきたのかもしれない。

そこで地域の人やものを活用しながら、課題を自分事として考え、仲間と共に提案力・企画力を育てるプロジェクト学習を行いたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

(1) 目指す生徒像

研究主題をもとに、本研究で目指す具体的な生徒像を以下のように設定した。

- ・ 地域とつながろうとし、その中で出た課題を自分事として考える生徒
- ・ 課題解決のために、仲間と共に考え、提案したり企画したりする生徒

(2) 研究の仮説

【仮説1】

自分の住んでいる地域から課題を発見し、単元計画を工夫して地域の人やものとながらる機会を作り出せば、課題を自分事として考えられるだろう。

【仮説2】

提案する意図を生徒自身が理解し、提案・企画する機会を定期的に設ければ、仲間と共に提案力・企画力を高めることができるだろう。

(3) 研究の手立て

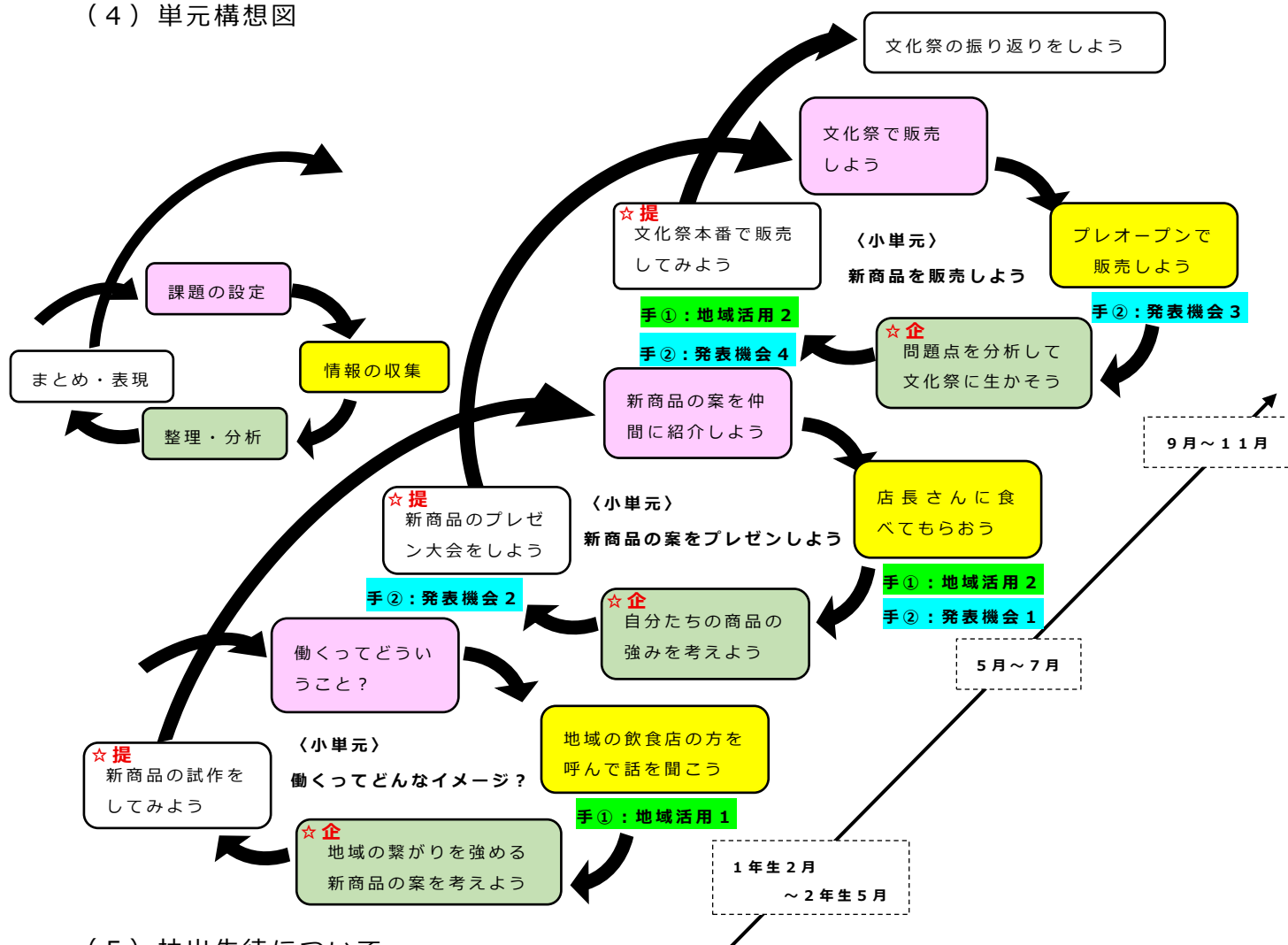
【仮説 1】に対する手立て①

浄水に生きる地域の人、ものを活用し、生徒たちと関わる機会を作るように単元を計画する

【仮説 2】に対する手立て②

提案力・企画力を視覚的に評価できるように定期的に発表の場を設ける。

(4) 単元構想図



(5) 抽出生徒について

	生徒 A	生徒 B
実態	「働くとは？」のアンケートには「大変そうだが、お金のためにやらなくてはいけないこと」という感じで、働くことに対してネガティブな印象をもっていた。	「自分の意見を、自信をもって言うことができる」というアンケートに「No」と答えていた。自分の思ったことを表現しているが、躊躇している姿をよく見かける。
期待する姿	地域の企業の方と関わる中で、働くことの大変さを理解するとともに、働くことの良さにも気づき、それを文化祭等で表現して欲しい。	自分の思いを提案したり、企画したりする経験の中で、その良さに気づき、自ら進んで人前でも自信をもって提案できるようになって欲しい。

3 研究の実際

(1)「働くとは？」で価値観をゆさぶる

1年生の2月に学年集会を実施した。「働くとは？」というアンケートを事前に実施し、その結果を伝えた。「お金のために仕方ない」が43%、「大変そう、めんどそう、辛そう」が31%、「人のためになる」が4%だと伝えた。そして、「実際に働いている人の話を聞いたことがあるか？」と聞くと、ほとんどおらず、インターネットなどからのイメージであった。生徒Aはこの日の振り返りに「働くことに、いいイメージはないが、実際に働いている人がどんな感じで思っているのか知りたい」と書いた。

浄水中学校は文化祭「まごころフェスタ」で総合的な学習の時間で学んだことを披露するので、2年生では「企業」とコラボレーションすることは生徒たちも知っていた。そこで「地域の企業でコラボレーションしたい企業はあるか」というアンケートを実施した。

(2)地域の飲食店を招いた協働学習

2月の集会でアンケートを取った結果、ハンバーガー店、焼肉店、洋菓子店、カレー店などが上位になり、それをもとに、コラボレーションする企業を選定した。2年生の「キャリア教育」では、職場体験を実施する機会が多いが、働く人と関わる機会が、職場体験の日のみなのはもったいないと考え、4月から文化祭のある10月まで、何度か関わる機会を計画することにした。**(手立て①)** 4月に



【資料1 ハンバーガー店の店主との出会い】

6つの企業の中からどの企業と関わりたいかの話し合いを行い、決定したら企業の方に学校に来ていただき、事前の打ち合わせを担当と行った。

本学級では話し合いの結果、ハンバーガー店とコラボレーションすることになった。そして、実際にハンバーガー店の店主を招聘し、まず店主から「働く」ということについて講話をしていただいた。また、事前に生徒たちも質問を準備しており、生徒Aは「働く上での大変さと喜び」について質問した。店主は「体力的にきつい時はあるけど、車の整備の他に、空いた時間でハンバーガー店をやりたいと思って始めたから、やりたいことができてとても楽しい。お客様の喜んでいる姿を見ることが喜び」と答えた。この日の振り返りに生徒Aは次のように書いた。

【資料2 生徒Aの講話を聞いた振り返り】

朝一番に来て、パンズ作りからすることに驚きました。パンズを作ることをやめればもっと楽になると思うけど、こだわっていると聞いて食べたくまりました。働く上で、こだわりということが大切なんだと思いました。大変さもあるけど、お客様の笑顔のために一生懸命に働いているのが、カッコよく感じました。

(3)商品企画

それから実際に商品を考えて。生徒Aの班は今までにないハンバーガー、地域の人との仲を深めるハンバーガーをコンセプトに考え、ホワイトボー



【資料3 新商品のハンバーガーの案】



【資料4 新商品の試作品づくり】

ドには想いやアイデアがたくさん書かれていた。そして、その商品案をもとに、調理実習を行った。

その後、商品の強みや改善点を見つめ直したり、仲間の意見を聞いて見つけたりするために、学級の中も商品のプレゼン大会を行った。生徒たちに商品を提案するときに大切な

ことは何かと投げかけ、話し合った結果「わかりやすさ」「アイデアの良さ」「実現の可能性の高さ」ということになったので、これを項目にして、2班ずつプレゼンテーションを行い、クラス全員でマトリクス評価を行った。**(手立て2)** 1班の生徒Bは、アイデアの良さはあったが、コンセプトなどのわかりやすさが不十分だったという評価を受けた。理由としては、「図が見にくい」「伝えたい内容が多い」「どんな人を買ってもらいたいかがわかりにくい」などの

意見が出た。また、ハンバーガー店の店主の方に生徒たちが試作したハンバーガーを実際に食べて評価していただいた。**(手立て1)** 店主も生徒Bの班のアイデアの良さを褒めたが、「提供までに時間がかかりそう」という意見を伝えられた。これを受けて、生徒Bは「商品をどんな人を買ってもらいたいかなどの目的をもう一度考え直したい」「次はみんなにわかりやすく発表したい」と振り返った。

	わかりやすさ	アイデアの良さ	実現の可能性
1班	2.3	3.6	3.2
2班	3.4	3.3	3.5

【資料5 1回目のプレゼンテーションのマトリクス評価】



【資料6 店主に試作品を見てもらう】

(4) 経営者の方と語る会

「働く」ということを、多角的な視点で捉えさせるため、6月に「経済同友会」が行っている「学校と経営者の交流活動」による出張授業を実施した。**(手立て1)** 国内だけでなく世界で活躍する会社の経営者の方々、某ハンバーガーチェーンの



【資料7 経営者の方と語る会の様子】

社外取締役社長、教育関係などのICT事業を手掛ける社長貿易関係で、アフリカなどで活躍された取締役に来ていただき、講演と意見交換を行った。地元の企業の方の話だけでなく、違った視点で働くということに関わっている経営者の方の話を聞いたり、自分の意見に対してアドバイスをもらったりした。

【資料8 生徒Aの振り返り】

経営者の方が「高校生の時から目標を決めて」と話していた。先のことを考えること、しっかり目標を決めることで、「働く」ということが「辛い」から「生きがい」に変わることがわかった。目標をもって働くが大切だということが分かった。

【資料9 生徒Bの振り返り】

経営者の方に自分の意見を伝えたら、「具体的でいいね」とほめられた。自分の意見をしっかりと伝える力が大切だと言っていたので、これからも自分の意見をしっかりと伝えられるように頑張りたい。

（５）中間発表会

7月に各クラスの取り組みを発表する機会として、中間発表会を行った。**（手立て２）**各クラスがコラボレーションする企業の方から「働く」ということについて教えていただいたことや商品開発の途中経過、文化祭で目指したいことなどを発表した。

また各クラスがコラボレーションしている企業の方にも中間発表会を聞いていただき、全体を通してアドバイスをいただいた。**（手立て１）**中間発表会でプレゼンテーションをした生徒Bは次のように振り返った。

【資料１１ 生徒Bの中間発表会後の振り返り】

中間発表会で発表では、前回のプレゼン大会で注意された「わかりやすさ」を改善するために、聞く人の立場に立って資料を一度見てみました。そうすると、初めて聞く人はここが伝わらないだろうなということがわかりました。

今まで発表するときは、失敗しないかなと言うことばかり考えていたけど、伝わるかなということを考えることができました。

その後、学級にもどって発表についてクラス全員でマトリクス評価を行った。**（手立て２）**感想の中には「文字だけでなく、写真や表を使っていたので、わかりやすかった」「前回の商品の改善点も示されていたところがよかった」「伝えたいことがはっきりしていた」などが上がった。その感想を見て、生徒Bは「前回の発表から改善点を直したことで、いい発表になったと思う。次は商品を実現できるように頑張りたい」と述べた。



【資料１０ 中間発表会の様子】

	わかりやすさ	アイデアの良さ	実現の可能性
前回	2.3	3.6	3.2
今回	3.7	4.3	4.1

【資料１２ 発表２回目のマトリクス評価】

（６）プレオープン

9月中旬まで、調理実習やコラボレーションしている店主の方と話し合い、新商品を開発することができた。そして、文化祭の２週間前に、他学年の生徒をお客さんに見立てて、プレオープンを実施した。コラボレーションしている店主の方と初めて一緒に働く機会となった。あまりの行列に、多くのお客さんを待たせる結果となった。



【資料１３ 新商品とプレオープンの様子】

【資料１４ 生徒Aのプレオープン後の振り返り】

プレオープンで実際に地域の方々と関わってみて、買ってくれてありがとうという気持ちを込めて目を合わせて笑顔で商品を渡すことが大切だと思いました。店長、副店長と相談をして、整列⇒注文から会計⇒受け渡しまでのルートをどうするのか考えたい。

（７）文化祭本番

10月下旬に文化祭「まごころフェスタ」を開催した。プレオープンで出た問題点を改善し、注文、会計、商品の受け渡しを確認した。

新商品も開始30分で売り切れになり、全ての商品も開始1時間半で完売することができ、生徒からは「プレで上手くいかなかったところを改善できたから、お客さんを困らせなかった。」「たくさんお客さんが来て大変だったけど、たくさんの



【資料14 文化祭本番の様子】

人に喜んでもらえて嬉しかった」「新しい商品を作るためにめちゃくちゃ時間がかかったけど、頑張ってたかった」と振り返りに書き、とても満足そうな顔をしていた。

【資料15 生徒Aの文化祭本番後の振り返り】

働くことはめんどくさいとかじゃないくて楽しいことということがわかりました。まごフェスの準備の始めの方はお客さんのことをあまり考えずにハンバーガーの大きさとか自分で勝手に想像してた。でもみんなと話し合っていくともっとお客さんのことを考えて作らないといけないし、めんどくさいとかやだなと思っていたところがあったけどプレとか当日お客さんと関わってみたりすると頑張ってきたよかったなという気持ちの方が大きくなってうれしくなり、そこが自分でも成長できたんじゃないかなと思いました。

4 研究の成果と課題

（１）成果

本校では、今年度より学年合唱が復活することになった。学年合唱を自分事として考えられるようにしたいと思い、生徒たちに投げかけた。すると生徒Aが合唱する曲を自分たちで決めたいと言った。そして合唱曲を決めるときに、生徒Bが「最終的に残った候補曲でプレゼンテーション大会をして決めたい」と話した。

生徒Bも実行委員になり、自分が推薦する曲を学年合唱の候補曲のプレゼンテーション資料を作成し、どうしてこの曲が学年合唱にふさわしいのかを学年の前で提案した。

今回の実践を通して、生徒たちは自分事として考え、それを「提案したい」と思えるようになった。



【資料15 学年合唱のプレゼンの様子】

（２）課題

本実践のように、生徒自身が課題を自分事として考え、仲間と共に提案力・企画力を高められる授業を充実させるには、十分な時間と準備が必要である。しかし、すべての授業において、このような学びを実践することは難しい。そのため多くのことをやるのではなく、要点を絞って学習を進め、より自分事として考えられる授業を行っていきたい。